



SYRIDE SYS`NAV XL

ブロード山の上空 8,000m のフライトで、シライド社の最新コンパクトバリオが威力を発揮。

記：マーカス・キング

シライド社のシスナビは、コンパクトなケースでフル GPS/バリオ機能を求めるハイクアンドフライやタンデムのパイロットに特におすすめのコンパクト バリオだ。昨年、同社からその最新バージョンであるシスナビ XL が発表された。

今までのモデルに比べると、画面が大きくなり、音が良くなり、ブルートゥース機能も加わった。空域警告、競技タスクのナビゲーションなど、今までのバージョンの機能は全て引き継いでいる。

アントワヌ・ジラルール と フランソワ・ラゴルスキ は、昨年、パキスタンへ遠征したさいの 8,000m 以上での氷点下のカラコルムでの厳しいフライトにおいて、この最終プロトタイプが素晴らしい働きをすることを証明した。私は、それよりも少しだけ高度が低く暖かなフレンチ アルプスの環境で、自分のシスナビ XL をテストする機会を得た。

【30%大きな画面】

まず最初に目につくのは、今までのバージョンよりも30%大きくなった画面のサイズだ。ケース自体は同じサイズだが、重さは90gだったのを、頑張って81gに削減している。

電源を入れてみると、画面は明らかにクリアになっている。シスナビ XL では、今までのものよりもコントラストも精細度も増したアクティブ-マトリックス レフレクティブ技術を採用している。実際のところ、このおかげで直射日光下でも、読み取りが楽だ。また、ひとつの画面からより多くの情報を得ることが出来るようになった。

今までのバージョンと同じくカスタマイズできる画面が4画面、用意されているが、今までのバージョンでは大きな文字だと3つの情報しか配置できなかったのに対して、XL では少なくともあと3つ以上の情報を表示させることが出来る。精細度が増したことで、ひとつの画面上からより多くのデータを得ることが出来るようになった。私は、自分の目の前の画面に、グラフィカル風情報を含む7アイテムのデータを詰め込むことが出来た。

画面のレイアウトは、使い勝手の良いシライド社のオンラインツールを用いて作成できる。また、この作成ツールでは、空域あるいはウェイポイントへの接近やサーマリングとグライドの自動切り換えを、好みに応じて設定できる。

この設定変更は、バリオ本体ではできないので、PC 上でシライド PC ツール ソフトウェアを使い、画面レイアウトを決めて PC にそのファイルをダウンロードしたものをバリオへアップロードすることになっている。このソフトウェアはまた、フライトデータのダウンロードやバリオの詳細な設定、ファームウェアの更新にも用いられている。

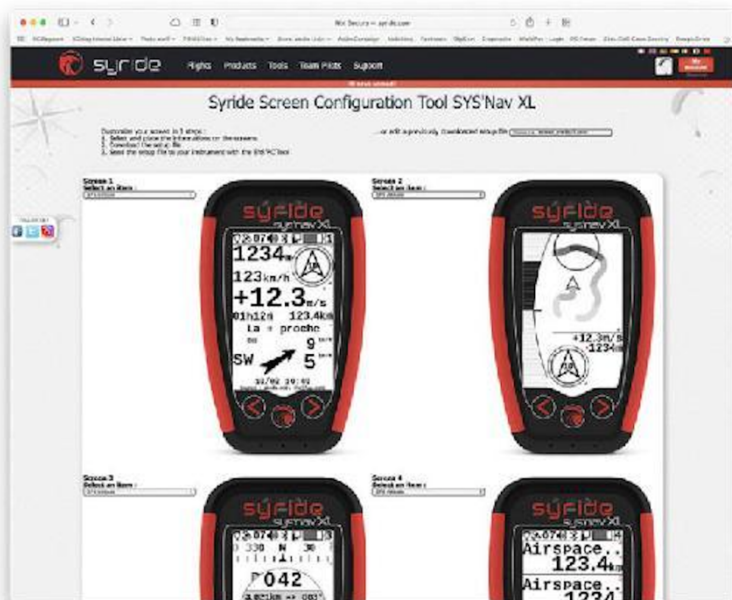
【接続機能とアプリ】

充電と PC への接続には、USB-C を持っている。新しいソフトウェアでは別のソフトウェアを介さなくても、フライトデータへアクセスできる。XL ではまた、ブルートゥースへの接続機能も加えられた。

シライド社からは、アンドロイドと iOS どちらのアプリも用意されていて、一度、自分のスマホとペアリングしてしまえば、電源を入れた途端に自動的に接続される。自動接続されない場合は、アプリを開いて接続し直すことになるが、通常は安定して接続してくれている。

また、このアプリはスマホを通じて、フライト中のライブトラッキング情報を発信したり、winds.mobi のライブ風情報を受信してバリオ画面上に表示させたりすることが出来る。その表示させるデータも、最寄りの観測点からのものか、予め設定した観測点からのものかも選択できるようになる予定だ。

これは現在、画面の作成の際に設定しなければいけないものだが、これも将来的には、アプリからの設定も可能になることだろう。特に、大きな谷エリアでは観測点の選択によって独特の谷エリア風の移動をチェックするのに役立つ。





【ライブトラッキング】

ライブトラッキングは、シライド社のウェブサイト上でのみ見る事が出来、現在のところ、この情報を他のシステムへ送ることは出来ないが、このライブトラッキング自体は上手く作動していて、3D で見えることもできる。また、自分のライブトラッキングを公開するか非公開とするかの選択もできる。

設定しだいで、いったん着陸するとこのアプリを搭載したバリオから自動的にシライド社のウェブサイトへフライトログがアップロードされて、2D ないし3D でフライトを再現することを選択できる。そこからさらに、XContest や DHV XC サイトへ自動的にフライト情報を送るようにすることも可能だ。私のテストでは、この機能は問題なく作動した。将来的には、QR コードを使ってルート設定やタスクの取り込みを行えるアップデートも予定されている。

また、Navigator や XCTrack、FlySkyHy と言った他のアプリを外部センサーとして使用することもできるが、今のところ、こうすると風の情報は得られなくなる。シライド社では、シライドアプリを通じて第3者アプリも接続可能とできるように計画中だ。

【バリオ音】

この他の主な変更点は、ブザーではなくスピーカーを使用したことだ。同じシライド社のより大型のシスエボリューションで用いているものに比べても2倍もパワフルなものだ。今までのブザーと比べると、聞きやすい大きくて快適な音を出す。

バリオとしては、異なるレベルの感度が選択でき、ゼロ上昇域ブザーや即時バリオ機能も使える。シライド社では、これらは初期設定にはしていない。

使ってみて、シスナビ XL のバリオ初期設定はとても良い感じだったが、私自身は、とても敏感な XCTracer に馴れているので、結局、少し感度を上げた調整とした。シライド社のウェブサイトでは、沈下や上昇の様々なレベルに対応した周波数変化を作成することもできる。



【ライザーへの装着】

ライザーへの装着に際しては、最初に小さなセーフティループをカラビナに通しておく。私は、下側のベルクロをカラビナに巻き、上側のベルクロをライザーに巻くのがちょうど良いと思った。長い使用の間にはライザーを傷めることも考えられるので、ベルクロとライザーの間に傷み防止のスリーブを入れることを、シライド社では推奨している。

計器パネルの必要が無く、ハイクアンドフライやタンデム飛行には特に最適だ。もちろん、計器パネルを用いてアプリを入れたスマホと並べて、さらに多くの機能を楽しむことも簡単だ。

【フライトでは】

フライト中の使い勝手が良い。前のバージョンに比べて小さくなったとは言え、操作ボタンはまだ十分に大きい。パイロットの手の近くにバリオが来るので、ボタン操作も楽だ。小さな画面なので、ナビゲーションは少し制限されるが、他のデバイス装備も楽なので、そちらでバックアップが効く。

バッテリーの持ちは、前のバージョンよりは少なくなったが、これも多くの機能が加わったためだ。シライド社によると、音量の設定がバッテリー寿命に大きく影響するとのことで、そう言えば私は音量をとて大きめにしていた。それでも数日間のフライトには問題なく、USBで簡単に充電できる。

唯一欠けているとすれば、対空警戒の Flarm ビーコンのたぐいだ。私のように、セールプレーンがたくさん飛んでいるエリアで飛ぶ場合は、ありがたい機能である。シライド社では、ライブトラッキング機能をオープン グライダー ネットワークにリンクさせることで対応しようとしている。

【結論】

すでに人気のシスナビに対して、XL は素晴らしいアップグレードとなっている。使い勝手の良い小ささはそのままに素晴らしい機能の数々を加え、画面もとても読み取りやすくなった。ブルートゥースの使いやすさも素晴らしい。一度セットアップしてしまえば、電源が入ったとたんにつながっている。

バリオ単体でも素晴らしい機能を発揮し、必要となればいつでもいろいろなアプリとも柔軟に連携できる。

画像左が、SYS`Nav XL

画像右が、SYS`Gps
(SYS`Alti /SYS`Nav も同様の大きさ)

